お嬢様官能小説家
渡戸笑
わたど
えむ
小説 千夜詠
挿絵 緑木邑
立ち読み版

第一章　女子校生、放課後の牝奴隷？　006
第二章　美メイド奉仕艶技？　019
第三章　美少女拘束の夜？　前編　051
第四章　美少女拘束の夜？　後編　110
第五章　肛辱のクラスメイト？　139
第六章　旧校舎の隷嬢？　182
エピローグ　249

登場人物紹介

Characters

舞扇（まいおうぎ） 紗弥加（さやか）

清楚で眉目秀麗。大企業グループの令嬢でありながら人当たりもよく、学園の男女からの憧れの的。

黛（まゆずみ）

紗弥加付きのメイド。あまり感情を出さず、淡々と仕事をこなすが主人想いで紗弥加の一番の理解者でもある。

木佐（きさ） 晃志郎（こうしろう）

正義感が強く行動力溢れる熱血漢。ただし、ちょっとずれたところがあり勘違いによる暴走も多い。

「こ、このノートを昨日教室で拾ったんだ。たぶん、舞扇さんのだと思うのだが……。と、とにかく返そう」
「え、ええ……」
すっとぼける、という手もあったが、つい受け取ってしまう。これでは完全に、このノートが自分のものだと認めてしまったということだ。
大事なネタ帳は返ってきた。だが、しばらくその場から紗弥加も晃志郎も動けない。妙な緊張感が辺りに漂っていた。
「あの、それだけ……？」
先に言葉を発したのは紗弥加の方だ。もしかしたら中身を見ていないのかとも考えたが、確認するまでは安心できない。
「そっ、それは……、えっと、なんだ……、つまり……、お、俺は、何があっても舞扇さんの味方でいるから！」
「はい？」
どういうことか？　もしかして中を読んで、それでも応援してくれるということなのか。
「その、困ったことがあったら、相談してくれ」
「困ったこと？」
「ああ、その……誰かに、脅されているとか、その、なんか、セクハラみたいなことをさ

れているとか……」
ピンときてしまった。ひょっとして……。
怯えるように、か細い声で言ってみる。
「もしかして、中を読みましたか？」
「え……っ、あ、いや……、す、すまない！」
綺麗な直立から、しっかりと頭を下げる晃志郎。滲み出る誠実さには好感が持てた。
もう少し確かめようと言葉を選ぶ。
「じゃあ、私の置かれてる状況は、知って……」
「ああ、その……、君が、誰かに脅されて……、酷いことをされているって……」
やっぱり。と心の中でげんなりと思った。
（なんで、私が本当に、レイプされなきゃいけないっての！　そりゃあ、まあ、そういうの好き、ですけど……。妄想だからいいんじゃない。けど……、これからどうしよう。木佐くんの中では、私は大勢の男子の肉便器にされて……）
つい顔が緩みそうになってしまう。彼はきっと想像したに違いない。学園でも最も人気のある清楚可憐なお嬢様の私の恥ずかしい姿。男たちに蹂躙される白い艶やかな肌。肉棒に貫かれるついこの間まで無垢だった私の女陰。
（やだ、いやらしいんだから、木佐くんったら……。きっとオチンチン大きくして、昨晩

は、私をおかずに……。大きくなった木佐くんのあそこ……）

これはもしかしてチャンスかもしれない。

紗弥加は生の男性器を見たことがない。執筆に関しても、メイドに調達してもらった画像と動画を見ながら表現を考えるだけだった。本物がいったいどんな匂いがして、どんな風に勃起していくのか、知りたい。知りたくて堪らない。

（利用させてもらうわ、木佐くん）

不意に訪れた絶好の機会に、心の中でニンマリと笑う。

「そ、そう……、じゃあ、木佐くんも、私を脅して、体を欲しているのね」

「な……っ、そ、そんなはず……」

おそらく、自分がそんな風に思われるなんて少しも考えていなかったのだろう。困惑したような動揺を見せる少年に、とても怯える少女とは思えない迅速さで紗弥加は近づく。

自意識は確かに過剰気味だと自覚はしてはいる。ただ彼女は確かにきらめきを纏ったように美麗で、それは武器でもあった。

紗弥加の観察眼では、晃志郎はかなりの純情タイプだ。その彼に一度憂いを込めた瞳で、顔を間近に寄せた。

「あ、ああ……」

真っ赤になる少年。

（やだ、ちょ、ちょっと可愛い……）

こちらまで赤面しそうになったが、今はもっと大事なことがある。

不意に麗顔（れいがん）が眼前に迫った晃志郎は、混乱したように動きが止まった。その機会に紗弥加はしゃがみこむ。男の子の腰が、目の前にやってきた。

（よ、よし、近づけた。ごめんなさい、木佐くん。み、見せてもらうだけだから！）

いざとなると勇気がいる。だが処女の官能小説家にとって、リアルな男性自身を知らないという欠点はどうしても克服したい課題なのだ。四の五の言っていられない。

震えそうな両手を伸ばし、少年のベルトに手をかけた。

「ちょ、ちょっと、舞扇さん、な、何をして……」

「これで、許してください。手で……してあげますから」

迫真の演技である。勿論計算もあった。実際に触れるなんてきっとできない。観察だけして、やっぱりできない、と泣けば、きっとこの単純な男はそれ以上を求めてこないだろう。

「て、手でって……。うぅ……やめるんだ！」

ベルトを外しにかかろうとしたその時、きつく肩が握り締められた。

真剣な瞳が見つめてくる。彼の顔を見上げながら、紗弥加は、それで動けなくなった。

「やめるんだ、舞扇さん。俺は、こんなことを望んじゃいない。俺は……君にこんなこと

をさせないように、守ってやりたいんだ！」
「な……」
何なの、この男は？　正義を妄信するだけの馬鹿で、実際はただのヘタレだと思っていたのに。それなのに、力強く肩を握られ、余りにも誠実な瞳を向けてくる。罪悪感と同時に、先程までとは異質の鼓動の高鳴りを覚えた。
（って、これじゃあ、企みが台無しじゃない。ここまで言われて、脅されているつもりでいるふりしたら、私って馬鹿じゃない）
晃志郎に肩を掴まれ、自分は彼のベルトに手をかけた状態で時間だけが流れていく。
ここは、一旦引くしかない、そう考えた時だった。
「さあ、今のうちです」
刹那、何が起こったのか理解に苦しむ。
晃志郎は誰かに後ろから羽交い絞めにされていた。彼の後ろに、見覚えのある黒いスカートが揺れている。背の高い女性。金髪のショートカットの上に白いカチューシャを乗せていた。
「ま、黛（まゆずみ）!?　ど、どうしてここに……？」
舞扇家に仕える紗弥加の専属メイド、黛がそこにいた。
いったいどこから湧いて出たのか？　紗弥加はおろか、晃志郎もまったく気配を感じら

れなかったようだ。
　相変わらずの乏しい表情で、こちらを見つめている彼女の行動原理はひとえに大事なお嬢様の為に他ならない。それは重々承知していて、紗弥加の作家としての活動も唯一知っているのも黛だ。ちなみに紗弥加の処女作品を応募したのも彼女である。
「何をしています。さあ、今のうちに、この男のなにを……」
「く……っ、放せっ、いったい何者だ」
　自分のメイドに羽交い絞めされているクラスメイトを見ながら、あわわと慌ててしまう。だからつい、
「こ、この女は、私を脅している連中の仲間なの」
　と言ってしまった。
「お嬢様っ、何を言って……」
　もう後には引けない。立ち上がると、メイドの手首を取って、強引に連れていく。少年は刹那ぽかんとしたが、直ぐに心配して声を出した。
「舞扇さん！」
「だ、大丈夫よ、木佐くん。ちょっと待っていて……」
　何がいったい大丈夫なのか。この不自然さは後の演技力でカバーしてみせる。お嬢様官能小説家の一世一代の狂言の幕はまだ上がったばかりだ。

＊

予測不能の突然の出来事に呆気にとられ、言われるままにその場に留まってしまった晃志郎。

可憐なクラスメイトと謎のメイド服の女が校舎の角に消えて数分経った。時間の経過ごとに不安が大きくなっていく。自分もついていくべきではなかったのか、と何度も自問して、ようやく追いかけようと決めたその時、二人の女性は姿を現した。

「お、お待たせしました」

ぎこちない笑みを浮べる紗弥加。いったい何を話していたのか、とても気になるところである。

少女の前を謎の金髪女が歩いていた。先程はあまりよく見ていなかったが、とても整った顔立ちをしている。背は晃志郎と同じくらいまで高く、黒い英国風のロング丈のワンピースに白いエプロンのメイド服を身に纏っていた。

だが滲み出る雰囲気は、世間一般が抱くメイドのそれとは明らかに違っている。機械仕掛けのような無機的な表情で、切れ長の瞳はこちらを射貫くような鋭さだ。

（な、なんなんだ……この女性はっ）

まるで隙がない。晃志郎の額に一筋汗が流れていった。
黛と呼ばれた女が正面に立つ。
「ワレワレガコノオ嬢様ニシテイルコトヲ知ッタヨウダナ。コウナッタラ、オ前ノ恥ズカシイ写真モ撮ッテ、手出シガデキナイヨウニシテヤル。アハハハ……」
何だか片言のようだが外国人なのだろうか？　うん、金髪だしな。
後方で舞扇さんが引き攣った顔をしている。俺のことを心配してくれているのだ。
「お前たちの悪事に屈する俺では……なっ！」
メイドの動きがまるで見えなかった。気付くと黛は、自分の背後にいて、慌てて振り返ると、彼女は晃志郎のベルトを持っている。
ストン、と制服のズボンが落ちた。
「うわあ、な、何だ……!?」
焦った少年は、自分のズボンに足を取られてその場に倒れ込んだ。
間髪いれず金髪メイドに覆い被さられる。一瞬、目の前が真っ暗になった。
慌ててもがくと、片手が柔らかいものに触れる。張りがあって、弾力があって、大きく丸いもの。
「あん……っ」
やけに可愛らしい声を聞きながら、晃志郎は顔を塞いだ布切れのようなものを拭う。

途端に見えた光景は、白肌のむっちりした太股と黒い下着にガーターベルトだった。
「ぬあっ、こ、これは……」
黛は確かに少年の上に被さっていた。
「純情そうに見えて、意外と大胆ですね」
ただ、脚は彼の頭の方で、頭は股間の上にある。四つん這いの格好で、晃志郎の若々しい股間を妖しく細めた瞳で見つめていた。
晃志郎はというと、もうジタバタすることもできなくなってしまう。黛を退けようとすれば、彼女の下半身のどこかに触れなくてはならない。女の子の手さえ握ったことのない男にできるはずもなかった。
「く、くそ……、何をする気だ」
言葉だけで足掻く。目の前に女性の下着だけの股間があって、真っ赤になりながら顔を背けるが、どうしてもチラチラとそちらに視線が向かってしまった。
大人びた黒いTバックの下着は、クロッチがぴったりと女そのものに張り付いて、どこか湿気づいた柔らかさを感じさせる。黒生地は薄く、微かに肉土手に食い込んでいるようで、その周辺の肌色が僅かに濃かった。蒸れたような生々しさが顔に降りかかってくるようで、熱気を感じる。
カーと顔が熱くなって、血流が下腹部へと雪崩(なだ)れ込んでいく。

「威勢のいい坊やですね、でも、膨らんできていますよ」
年下の少年をからかうように、彼女は下着を持ち上げだした逸物をツンと一度指で弾く。
「こ、この……、どけ……っ、うわァ！」
腹部と下着の間に指をかけられた。
「ほら、お前のやらしいもの、見せてもらいましょうか」
これ以上は流石に耐えられない。もう一度必死に逃れようと体を捻らせようとした。何せ、清純なお嬢様、舞扇紗弥加も見ているのだ。
「だ、だめ……っ、木佐くん。お願い、じっとしていて、でないと、もっと酷いことをされてしまいます」
どういうわけか何時の間にか晃志郎の下半身の近くに寄っていた紗弥加が、困ったような瞳を向けてくる。
（そ、そういうことか……。黛は女。俺が舞扇さんの身代わりになれば……）
犠牲心に酔いながら、それでも股間を膨らませてしまっている自分。心を落ち着かせようと制御できない牡の反応に戸惑いは隠せなかった。
（俺は、いやらしいことを期待している？　ち、違う……。これは、舞扇さんの為……）
下着のゴムが伸ばされ、細くしなやかな指にズリ下ろされていく。妖艶に笑みを浮べる黛。紗弥加は頬を桜色に染めながらも、じっとその様子を見つめていた。恥ずかしい。よ

りによって尊敬する女子に見られるなんて。
「み、見ないでくれ、舞扇さん」
「ご、ごめんなさい。でも、見ているように脅されてるの。ほ、本当よ」
紗弥加は直視している。目を爛々と輝かせ、どこか期待しているような様子で、しきりに荒く吐息を漏らす。ゴクッと彼女が唾を飲み込んだその直後、完全に少年の男性自身は露(あらわ)になった。
「う……うう……」
女性に組み敷かれ、股間を曝(さら)け出される情けない状態に強く羞恥心が湧いてくる。
「す、凄い……、こんな……木佐くんのが、だんだん大きくなって……」
両手を口元に添えながら、微かに潤ませた瞳で紗弥加が熱い視線を浴びせてきた。そんな風に彼女に見られていると思うだけで、肉棒は硬さを増してしまい、抑えられなくなってくる。
「まあ、女の子に見られて、感じちゃってるの？」
金髪メイドの興奮したような息遣いが、男根に当たり、心地良くさえ感じてしまう。
「ち、違う……。うわっ……、よ、よせ……」
睾丸を不意に摩(さす)られ、そっと柔らかな手の平に包まれた。強すぎず、緩やかな圧迫を与えられ、肉棒はいきり立つ。

（あれ？　どうして木佐くんが……。ああ、そうか、彼がご主人様なんだ……。やけにリアルな私の妄想……）

初めてばかりの強い刺激と、湧き上がる肉欲に完全に夢想の中にいる気分。

これが自分の妄想なら、ドMな欲求のままにしたっていいじゃないかと考えた。だから、こんな台詞も言ってしまう。

「はあ、はあ、ご、ご主人様、紗弥加は満足にご奉仕もできないダメな肉奴隷です」

「ご、ご主人様？　お、俺のこと……？」

やけに戸惑っている同級生のマスター。ご主人様としては、いささか可愛げがありすぎる。

「私をこんな風に調教しておいて、貴方以外にご主人様がいるのですか？　それとも、怒っていらっしゃるのですか？　私が、下手だから」

やはりどう反応していいのか分からないといった様子の少年である。

令嬢の肉果実を揺さぶっていた手を止めて、黛が状況を呟いた。

「どうやら、お嬢様の精神は、現実から別の世界に旅立たれたようですね」

「そ、それっていったい……。まさか、過度のストレスで……」

メイドは、視線をまったく別の方に向けて言った。

「え、ええ……たぶん……」

何を話しているのかしら、この人たちは。霞掛かった思考の中でそう思い、それでも紗弥加は調教されつくしたマゾ牝であり続けた。

「ああ、こんな駄豚は、お仕置きされてしまうのだわ。こ、こんな風に、無理やり恥ずかしい格好にされて……」

黛が後ろから離れると、誰が手をくだしたわけでもなく、紗弥加は自分で、縄に拘束された上半身を床に倒し、剥き出しのお尻を晃志郎の方に突き上げる姿で向かせた。

丸く肉付いた尻房の谷間が少年の瞳に飛び込んでいく。

呼吸するようにヒクつくアナル孔が覗けて、その下にはぐっしょりと濡れた粘膜の秘裂があった。充血して先程までよりも肉ビラはほんのりと厚みを増している。淫蜜の涎は、勃起したクリトリスを舐るように滴り、周辺の恥毛も濡れて卑肉に張り付き、いやらしさを過度に演出していた。

「ま、舞扇さん、こ、こんなに濡れて……」

「あはっ……、マゾ豚は、は、恥ずかしいけど……、み、見られて……こ、こんなになっちゃうんですぅ」

いつもの妄想よりもずっと強い羞恥が湧いてくる。彼に自分の淫らな本性を暴かれてしまったようで、見つめられるだけで、全身をくねらせて喘いでしまう。

強烈に少年を誘っていた。浅ましいマゾ牝は逃れようとするふりをしながら、悩ましげ

にそそるお尻を振り続ける。
「オチンチンで、オマ〇コの奥まで叩かれちゃうのね。やぁんっ、あん……」
大きく深い呼吸を奏でる興奮状態を見せながらも、晃志郎は一歩前に踏み出す勇気が持てない。
彼の心の内を見越して、黛が囁きかける。
「ああなってしまった以上、してあげないと元には戻りませんよ。これも、お嬢様の為です」
「ま、舞扇さんの……為……」
言い訳を与えられた少年は、潤んだ瞳を向けるクラスメイトに近寄っていった。
逞しくそそり立ち、凶悪に鰓を広げた肉棒が迫るごとに、リアルにいながら妄想爆発中の紗弥加の蜜壷はヒクついていく。ご馳走を目の前にした牝犬は淫蜜の涎を滴らせ、熱の篭った肉ビラの合間から、ぬちゃぬちゃと床に落ちていった。山芋に蹂躙されたクリトリスは、腫れ上がっている。
「いやぁん、犯されちゃうぅう。はん……っ！」
汗ばんだ晃志郎の手の平がぷるぷる揺れる尻肉を押さえた。膝をついて、強張った肉塊の先端が、秘裂に狙いをつけている。
「ま、舞扇さん、はあ、はあ、ご、ごめん……」

ぐちゃっ、と自身の下腹部から濡れ粘膜を裂く音が聞こえてきた。物理的な圧迫感が濃厚で、優しく閉じていた花弁が開かれ、内膜にきつい押し込めを感じる。溢れかえる牝汁がぬらぬらと肉棒を塗れさせていった。

（はれ……？　な、なんか、凄く熱くて……硬い……。やけに、生々しい……）

ぬぶ……っ！　ぬずず……。ぐりぐりと穿られ、引き裂かれるような感触が一直線に脳天まで走ってきた。

（な、なに⁉　い、痛い……っ、こ、こんなに痛かったっけ……。だ、だめ……）

プチッ……。破瓜の音が響いたような気がした。

「く……ぅ、ひぃ……、お、重いのぉ……」

女の子の大切な部分に起こるヒリヒリした痛みの後、繊細な粘膜が苛烈に押し広げられる衝撃が湧き起こる。

お腹の中が焼けるようなきつい刺激に、眉根を寄せて食い縛った。

「はあっ、俺、舞扇さんと……つ、繋がって……」

感動に震えているように、硬い肉棒がぶるぶると脈動して揺れている。

ヌズズッ、ズプズプ――ッ！　お腹の中の押し広げが、更に奥に進行してきた。

（ヒイッ！　痛い、痛いいっ……。どうして……、木佐くんのが、そんなにおっきいから？　なんて現実感、まさか、これって……、私の妄想は、既に神の域に達しているってことね！

こ、こんなことまで天才だったなんて、自分の才能が恐ろしい……）

重苦しい挿入感。だが、これこそが陵辱的ではないか。被虐的な性癖からくる悦びが爆発しそうで、嬉しそうに声を張り上げた。

「はあ、はあ、はあ、犯されてるぅ、私……、ああん、き、木佐くんの欲求のまま、してしてぇっ！」

もういっそ、自分のマゾヒズムに挑戦したくなる。肉棒の形状を過敏に膣で感じて、重厚な苦痛の分だけ被虐の興奮が強くなった。泣き叫ぶほど激しく突いてもらい、子宮の奥まで苛烈にノックして欲しい。その衝撃に乱れ喘ぎ音をあげるか、それとも快楽の高みを見ることができるのか。

「舞扇さんの、オ、オマ〇コ……、む、無茶苦茶気持ちいい……。な、なんか、吸い込まれるみたいだ。く、うう……っ」

別世界にいた令嬢の女陰を味わい、肉棒の半分まで挿れただけで、その感動と感触に晃志郎は蕩けそうな表情を見せている。

陰粘膜が太さに馴染み始め、紗弥加はもどかしさすら感じ始めた。

「ふあっ、はあ、精液便器にされた私は、ご主人様の、ザ、ザーメンを搾り出すまで、解放されないんですぅ」

煽るようにお尻を揺らし、男子の射精欲求を募らせる。

「うっ、ふう……、う、動かすよ」
ぬぶっ、ぬっぷ、ぬっぷ……。鋭角に張った鰓に膣肉が捻られるような感覚が湧いた。強すぎる刺激に、反射的に牝汁が更に溢れ出し、ぐちゃぐちゃと掻き回される。
「ヒイ、いんっ……。す、すっごいの……、ンっ……オマ〇コっ、削がれちゃう……」
質量十分な肉果実を床に押し付け、それをクッションにするように全身が前後に振られた。荒縄に拘束された上半身を身悶えさせて、体中から大量に汗を噴出させてる。
ぢゅぶっ、ぬぷっ、ぐちゅぐちゅ……。摩擦する熱が徐々に快楽のものへと変換されてきた。膣の粘膜ヒダの全てが、肉棒に甘えるように吸着して、媚びるように舐め回していく。肉の芯まで染み込んだマゾ体質では、初めての痛みも、興奮と悦楽への道しるべでしかないようだ。
「ん、はあ、はあ……、気持ちいい、気持ちいいよ、舞扇さん」
少年もまた夢見心地のよう。両手で学園でも有数の美少女の腰を掴み、もう抑えられない欲求のままに、下腹部を彼女のお尻に叩きつけている。抜き差しする巨木を淫蜜が伝い続け、二人の股間は濡れつくしていった。
「あひっ、ひんっ……、変な感じ……、よ、良くなってきちゃう……。も、もっと激しく、ひ、酷くして……。はあ、はあ、お尻……。お尻を叩いてくださいっ！」
妄想か現実かなんて紗弥加には関係なくなって、ただ一心に被虐的な快感の行く先を見

たくなってしまう。
晃志郎もまた悦楽に呆け、言われることに疑問も持たないように、彼女の欲求に従った。
「た、叩けばいいんだね。じゃあ……」
パン！　パン！　平手をぶつけ、柔らかな尻肉がぷるんと揺れる。
「ひゃいん！　はあ、はあ、何か、いい……。オマ〇コっ、きゅんきゅんしちゃいますぅ。も、もっと……」
手の平が叩きつけられた瞬間には、きゅっと膣で肉棒を締め付けていた。それが彼にとっても気持ちいいのか、だんだん夢中になったようにスパンキングが激しくなってくる。
「うほっ、俺のが、吸い付かれて、中のヒダヒダしたのが、動いてる……。ああ、も、もう俺……」
顫動（せんどう）を始めた魔性の肉壷が少年の理性を狂わせてきた。
「ヒ……っ、いいんっ……。お尻が熱いの、ひゃんっ……。これ……素敵……。癖になるううう！」
床に片頬をつけながら、唇から涎がだらしなく漏れていく。床に押し付けた豊満な柔果実の先端がコリコリのまま潰されながら、何度も擦り付けられた。上半身を拘束した荒縄が更に肌を苛むが、
「はあ、ひゃあっ……痛いの……気持ちいいですぅ……」

体中を蝕む刺激に陶酔する。

ぬぷっぅ、ぬぶぬぶぬぶ――っ！　彼の情熱と劣情そのものの苛烈な抉り込みの衝撃は、相変わらずの強烈な圧痛であったが、マゾ牝の卑肉はそれだけ余計に快感に変っていった。

私は今、熱血すぎる肉の仕置きを受ける奴隷。抑えきれない男子の欲求を享受するだけの肉便器。そう意識するだけで幸せになって、晃志郎を気持ちよくさせる為に健気に腰を振って奉仕する。

「んぅっ、が、我慢……できない……」

少年の唸りと共に、また一つ強張りが膨らんだような気がして、ズンズンと子宮口まで叩き込まれた。その重厚な衝撃のたびに黒髪を振り乱す。

「く、狂うぅうっ！　も、もっと……我慢しないで、我が侭してぇ――ッ」

肉の内から揺さぶられる振動に、下腹部の内側から膨大な快感が溢れ出した。脳から甘く痺れてしまい、無重力に放り込まれたような浮遊感を覚える。

ずっぷぅっ！　ぢゅぶぶぶっ！　肉の巨木が一層激しく穿り返してくる。そこから感じるのは切ない衝動への抑えられない欲求だ。

「うわああっ、で、出るぅっ、もう、もう……」

快楽のうねりに呑み込まれ、強すぎる刺激に脳内が揺さぶられる。マゾ牝の本能が狂わせて欲しいと淫乱な腰のグラインドをさせて、牡精を搾り取ろうと躍起になった。

「ふぁっ、はあぁ――ッ、み、見えるぅ……天国っ……。い、イかせてぇっ！　そこそこ、そこなのぉっ！」
肉棒を捻るように尻肉をぷるぷる揺らして、連続して跳ね上げた。
苛烈な刺激を全て染み込ませるように膣肉が呑み込んだ肉棒全体を締め上げる。
「だ、ダメだ。こ、このままじゃ、舞扇さんの、な、中にっ」
少女を案じて、爆発寸前の強張りを抜こうとする晃志郎。
「いや、いやっ！　欲しいですぅっ、ご主人様の、チ、チンポ汁ぅううっ！」
彼の気遣いなど関係なしに、紗弥加は貪欲になってお尻を男子の腰に張り付かせた。限界の震えが、膣の粘膜に過敏に伝って、
「く……うぐぅ、うわぁっ、で、出る出る出るぅっ！」
ドプッッ！　ドビュルルルッッ、ドプドプッッ！
膣をぐちゃぐちゃに掻き回すように暴れる肉棒の先端から、灼熱の炎を溶かしたようなザーメンが放たれた。
「あひぃいっ！　熱いの……っ、と、飛んじゃうぅううっ、イっ、イクぅううう！」
びゅくん、びゅくんと脈動を繰り返す肉棒に、心と体が絶頂まで跳ね上げられる。
暗闇の体育館の中で、真っ白に輝く世界に包まれた。その瞬間、きつく食い縛っていた牝孔が全て弛緩してしまう。

振り返った紗弥加の顔は真っ赤になっている。このお願いは相当に恥ずかしかったに違いない。

（舞扇さんの、お、お尻の孔を……舐める。汚いなんて思っていない。そうだ、それを証明する為にも……）

両手で尻房を掴む。たわわな肉は柔らかく手の平と指に弾力を伝えてきて、その感触の心地良さに酔わされそうだ。以前よりもずっと仲良くなれたはず。そして好きだという気持ちは、相手をちょっとからかいたくなるものだ。

アナルをもっとあからさまに露出させるように尻谷を左右に広げる。

「今、誰かがここに来たら、なんて思うんだろうね。学園で一、二を争う美少女が、男子にお尻を開かせている」

「やんっ……木佐くんがそんなこと言うなんて……。そんなこと、言っちゃ……」

恥ずかしがりながらも、どこか嬉しそうな黒髪のクラスメイト。彼女の下腹部からの体温が上昇したようで、肉ビラの裂け目からじわじわと淫蜜が滲んできていた。

（なんだろう？　舞扇さん、楽しそう？　じゃあ……）

顔を開かせたお尻とお尻の合間に近寄らせた。舐めるよりも先に鼻を鳴らす。

「い、いやん……っ、ど、どこを嗅いで……」

甘酸っぱい粘膜の匂いがした。嫌な匂いなどなくて、濃厚な湿気が鼻先を濡らしてくる

ようだ。
「舞扇さんのここ……。とってもスケベないい匂いがする」
「ああん、そ、そんなにスケベ？　やあんっ」
やはり嬉しそうである。それは相手が自分である為だと思いたい。
はあ、はあ、はあ……。秘め事を表すような感じる息遣いが聞こえてきた。
（見られたり、嗅がれたりして、気持ち良くなってる？　女の子って、そういうものなのか？　ああ、確かに、嗅いでる俺は、こ、興奮している）
これはとても恥ずかしい行為だ。変態的といっていい。だが羞恥に腰をくねらせる紗弥加の姿はとても愛らしくもあり、可愛くて、そして綺麗だ。
だがこのままというわけにもいかない。
（よ、よし……、な、舐めるんだ）
震える舌先、荒く熱い息を吹きかけながら、唇とは正反対の秘所にそっとタッチさせた。
ぺちゃ……。粘膜の先端が肛皺の一つに触れると、そのまま唾液に濡らしながら辺りを震わせていく。
「ひやっ！　はぁああ……、く、擽ったくって……き、気持ちいい……」
こちらの顔を叩くように、ビクンと少女のお尻が跳ねる。舌先の刺激に孔皺が時折きゅっと締まり込み、ヒクヒクとはしゃぐように蠢きだした。放たれてくる濃い熱気の蒸れが、

少年の頬を湿らせ、唾液混じりの粘膜の香りがきつくなってくる。
「ぺち、ちゅ……っ、ぺちゃぺちゃ……、お、美味しいよ、舞扇さん……」
挿入の前に、もっと解して楽にしてやらなくてはならない。
舌先をアナル皺の一つ一つの合間に潜り込ませるようにして、丹念に舐め回していく。唾液が泡立つほどに皺間に溜まり、ねとっと下へ垂れていった。
「ひいんっ！　し、舌がっ……、穿ってきて……。はあ、はあ、やだ……これ、お尻っ、とろとろになっちゃう……。ふぁっ……」
掴んだ柔らかな尻肉が催した時のようにプルプルと震え、彼女の肉裂からぬちゃぬちゃと淫蜜が滴っていく。
窄んでいた肛孔が僅かに弛緩してきて、もう少し、と晃志郎は微かに盛り上がった肉火口に吸い付くようにキスをした。
「やあんっ、吸い付かれちゃうっ……、お尻っ、じりじり痺れて……」
ちゅうっ、ちゅぱ……っ、ぺちょぺちょ……。手の平で柔らかな牝尻の感触を愉悦しながら、舌先で粘膜の弾力を楽しんでしまう。彼女の為と言い訳しながら、とても恥ずかしい部分を弄ぶ興奮にのめり込みそうになった。
「んっ、はあ……、だめ……ふわふわして、た、立っていられない」
黒髪美少女の膝が震え、途端に折れた。自身の唾液と彼女の汗蒸れで湿った少年の顔か

ら、たわわなお尻が落ちていき、紗弥加はその場で両手と膝をつける。
「ま、舞扇さん、大丈夫？」
髪の毛の一部を額と頬に張り付けた美顔が振り返ると、それはうっとりと瞼を半分下ろしていた。
「はあ、はあ、ご、ごめんなさい。木佐くんが、その、ペロペロするのが、上手いから……。か、感じすぎちゃったんです」
「え……っ、そ、そうなのか……」
世辞かもしれないと微かに思いつつ、やっぱり嬉しい晃志郎である。
「でも、このままじゃ、証明できないから……」
一度仰向けに背中を下につけた紗弥加は両の太股を自分の手で持ち上げるようにする。
「木佐くん、私の腰を上げて」
刺激的な姿を見せつけられながら、言われるままにしてみると、それは彼女の顔の上に下半身がくる、後で勉強させられ知ったが、まんぐり返しという格好になった。
（な、なんてエッチな姿……）
学校の屋上の一角で、直ぐ近くに数人の学生がいる状況にあって、下半身を肌蹴させているだけでも十分に恥ずかしいことだ。そのうえ、この大胆に大きく股間を開いたポーズは、否応なしに興奮を高めさせられた。

見下ろすと、ノーパンの彼女の下半身はスカートが完全に捲れ、大きく股間は開かれている。ヒクつくアナルも、ぐっしょりと濡れた粘膜のワレメも太陽光に焼かれ、湯気立つように牝本体の卑猥な、それはチーズとバターを一緒に溶かしたような、淫靡な香りが昇ってきた。

「ぁはぁ……、い、一度、されてみたかった……」

「え、え？　な、何？」

「な、何でもないわ。……それじゃあ、この格好のまま、して……」

強烈な淫猥な姿を見せられ、カーと逆上せ上がっていく晃志郎。少女の瑞々しくも生々しい肉の誘惑に素直に惹き寄せられて、再び広がった尻間に顔を埋める。

ぺちゃぺちゃぺちゃ、レロレロ……ッ、ぢゅぷ、ぢゅるぅ……。

溢れてしまう唾液と涎をまぶし、美少女クラスメイトのアナルをぐちょぐちょに濡らしていった。

「あんっ……、はあ、溶けていっちゃいそう……。これ、く、癖になるぅ……」

甘く感じる紗弥加の声が鼓膜を心地良く刺激してくれた。男冥利に尽きるというのか、少女が自分で気持ち良くなってくれる嬉しさに、もっとサービスしてあげたくなる。

「ひゃんっ……。今日はそっちじゃない……。けど……ああん、好きにして……」

既に破裂しそうに肥大したクリトリスを指先で優しく摘むと、腰が跳ねるように反応を

示した。彼女の牝芯に触れた周辺は、淫らな源泉から蜜が湧き上がり、直ぐに手の平全体を濡らしていく。

「い……いいのっ……、そ、そこっ、きくぅんっ。も、もっと我が侭に嬲ってぇ……」

言われるまでもなく、もう理性は衰退していき、欲求のままにもう片方の手を伸ばす。

むにゅっ、と滑りきった肉ビラを摘み、悪戯心に触発されて、無造作に伸ばしてみたりした。かなり滑稽な行為であろうが、これはきっと少女の羞恥心を煽っている。

「ひゃうんっ、私の、オ、オマ〇コっ、木佐くんの玩具にされてるぅ……」

貯水槽の反対側には何人かの生徒がいた。そんな場所で、女性器を表す俗語を口にする紗弥加。これが調教された結果の癖なのか分からない。だが今は彼女の反応の理由なんてどうでもよくなった。

（こ、こんなに、やらしいのに……、舞扇さん、き、綺麗だ……）

汗と喘ぎに乱れた髪も艶やかに、頬を桜色に染めた麗しい顔は、少年を魅了するには十分な妖艶さだ。

間近で鼻腔を強烈に擽ってくる発情した牝の香り。ぺちゃぺちゃとアナルを味わいながら、真っ赤に充血した肉花弁を見つめている。昼休みの学校の屋上で解放された美少女の下半身。弾けそうな自分の股間も、もう我慢できなくなってきた。

「はっ、はっ……、あん……ぅ……。じりじり来ちゃうぅっ……、も、もう……、激しい

のっ、ほ、欲しい……」
肛孔が蕩けきって弛緩していくのが分かった。
「ぷはっ……、お、俺も……」
女子の孔に包まれる快感を昨晩知ったばかりの肉棒が唸り声をあげているようだ。
彼女の股間から顔を離した晃志郎は腰を上げて、ズボンのファスナーを下ろす。一度行為を始めたら、もう周りの状況などどうでもよくなって、一気に肉棒を外気に晒した。
「やあんっ、き、木佐くんの……、オ、オチンチン……」
クラス一の優等生で、名家の令嬢の彼女が物欲しそうな顔で見つめている。
「証明をしないと、いけないんだよね。はあ、はあ……。お、俺……」
こくっと一つ頷く紗弥加。
「こ、このままの格好で……して……」
天を衝くようにいきり立った肉棒を強引に手で下に角度を変えた。腰を沈み込ませるようにして、先端を唾液塗れのアナル孔に添える。
「ん……っ、熱い……」
上半身を前に傾け、彼女の盛りのついたような表情を見下ろす。少し膨らんだ皺孔は十分に柔らかくなっていて、体重を掛けるように肉棒を落していくと、直ぐに窮屈な抵抗感が起こった。

ズブッ！　ヌズズ……ッ。蕩けきっていた少女の眉根がきつく寄って、それは確かに苦痛であろう。

「くっ、ううんっ……、重くっ、く、くるぅっ！」

だが、アナル孔を減り込ませ、確実に強張りは少女の直腸に潜り込む。そして、少女は、口内に唾液を煙らせた唇を大きく開いていった。

「くっ、ふぅ、はあ、お、おっきい……、おっきくて、ふあっ、あ……、硬いのが、私の、お、お、お尻っ……」

ズンっ、ズンっ、と欲望を押し込んでいく。そこは、体温がとても高いようで、熱く肉魂を包み込んできた。

（うわあっ、ここも、こんなに……き、気持ちいい……。ぬるぬる、してるんだな……）

強烈に拡張されている尻口に対して、中はしっとりと張り付いて、粘膜全体が吸い付いてくるようだ。

「はあ、はあ、ど、どお、木佐くん……、私のお尻？」

最初は表情を顰めた紗弥加であったが、既に熱く甘い吐息を漏らしながら、悦の篭った瞳で見つめてきている。やはり、ここを辱められていたのは本当のことだったのか。彼女を疑ってしまった罪悪感を覚えながらも、今は、局部に膨らんでくる衝動に意識が集中してしまう。

「う、うん……、確かに、お尻でも、できちゃうんだ」
「そうじゃなくって……、き、気持ち……いい？」
「あ、ああ、き、気持ちいい」
少し嬉しそうな顔をするお嬢様に、きゅんと心が鳴った気がした。
「も、もっと……具体的に……言って……。それで……ズボズボして」
「あ、ああ……、なんか、俺のが、あったかいのに包まれて……」
ぬず……っ、ズブっ！　反り返りを無理やり下げた肉棒が飛び出さないように更に奥まで押し込んだ。そこから、強く、ズンっ、と衝撃を与えるように腰を上下に動かしだす。
「ぁヒっ……、ヒいんっ、深いっ……、そ、それで、ど、どうっ、ぬちゃぬちゃする？快感は……溢れるの？」
ぐちゃぐちゃと尻孔の中を掻き回す。そこは、昨晩の蜜壷と比べれば、汁感は少なかったが、腸液に湿らされた粘膜の滑りがあった。膣以上に肉棒を噛み締めてきて、全体に纏わりついてくる。
「ああ、凄くきつくて……、熱い……、全体が、しゃぶられてるみたいで、とっても、は、はあ、やらしい……。舞扇さんのお尻っ、俺のを……吸い込んでく」
「はあっ、ンっ、んん……、そ、そんなにスケベなのっ、私のアナルっ、やあんっ、媚びちゃう。お尻で、木佐くんにっ、甘えちゃうぅん」

体を前のめりにして、黒髪のクラスメイトの顔を真上から見つめる。少しだけ遠い距離から、情熱的に視線を交わらせた。紗弥加は夢見心地のような表情から、ずっと唇を開いたままで、そこから快感を匂わせる息遣いを奏でている。

「き、気持ちいいっ……、気持ちいいよ、舞扇さん」

ズプっ、ズブブブ――ッ！　彼女のアナルを真っ先に犯した男たちの気持ちが理解できてしまう。背徳的な興奮と肉の擦り合う刺激と快楽。のめり込んで、陶酔していきそうになった。

「はあ、はあ……、も、もっと、無茶苦茶に……、ハアっ……」

股間と共に開いた肉裂から、溢れていく淫蜜が、漆黒の園を濡らして彼女の腹部を垂れ落ちていく。少し上体をあげると、その様子がよく見えて、酷く興奮させられる。

（普段は清楚な舞扇さんのが、こ、こんなにドスケベになって……）

ついこの間まで遠くから尊敬を込めて見ているだけの女子。その彼女を好きになってしまい、そして二度目の肉の繋がりを成している。喜びと興奮は更なる劣情を呼び、少女の求めに応じるように、激しく腰を上下させた。

「ヒ……っ、すご……っ、だめ……、も、もう……声っ、抑えられないっ！」

ヒクヒクとする膣孔が嬌声をあげているようだ。貯水槽越しの屋上では、学友たちが笑い声を発している。こんな人目を忍ぶ場所で、恋人同士がキスくらいはしたりするのだろ

う。だが、まさか、セックス、しかも背徳的な肛姦を行っているなんて誰が思うだろうか。
（外の雑音が、結構あるけど……、昨晩のような、あんな、乱れた声を張り上げたりしたら……）
絶対にバレる。それは焦りでなく、スリルとなって、二人を余計に燃え上がらせた。
ヌズズッ、ズプズプズプ――ゥ！
「ひゃっ、ひゃぁ――っ、き、きたぁんっ、すっごいのっ、ダメぇえぇっ！」
体を持ち上げるようにすると、反り返りが直腸を腹の方へと捻らせる。パンパンに膨らんだカリ首と亀頭の先端が膣まで震わせ、肉体の内側を歪ませられる強烈な刺激に、紗弥加は涙目になって瞳を見開いた。
「ヒっ、ヒイ……、だ……だめっ……。お腹の中まで、抉られてっ……、お尻が、気持ちいいのに、くっ、ハア、ハア、み、満たされちゃうぅ」
震えながら唇を噛み締めたが、どうしても開いてしまうのだろう。苦痛の分だけ、彼女が感じているように思えて仕方がない。マゾヒズム、という言葉が刹那、脳裏に浮ぶ。
慌てて探るように伸ばしたクラスメイトの手が、彼女の脱いだ下着を掴んだ。そして、自分でそれを唾液に濡れた口に押し込む。
（そうか、それで、声を……）
潤んだ瞳を向けながら、一つ頷く紗弥加。それは、苛烈なピストンを続けていいという

合図である。彼女の体のことを思慮したら、こんな無理な体位で行うべきではないのかもしれない。でも、悶える彼女がとても可愛くて、もっと激しく髪を振り乱させたくなってしまう。

ぬっぶっ……、ずぷずぷ――っ！　雄々しく立とうとする肉棒の先端が腸の粘膜を果敢に削いでいった。ぬちゃっと柔らかな感触が熱く局部を刺激して、牡の衝動を駆りたててくる。

「むうっ！　あんっ、んっ、んっ……、も、もっろ……ひて……」

涙の滲んだ瞳に、唇を薄布に埋められた黒髪少女。繊細なアナルを凶悪な男性自身に穿り返される姿は、強く陵辱感を湧き上がらせた。

（はあ、はあ、こ、こんな風に、俺の知らない男に、お、犯されて……）

激しく嫉妬し、顔も分からぬ陵辱者に敵愾心（てきがいしん）を覚える。それは歪んだ劣情を呼んで、誰よりも自分が紗弥加を乱れさせたいと思ってしまった。

ぐちゃっ、ぬぶぬぶっ……。湧き上がる想いのままに、腰を叩きつけるように下に押し込んだ。

「はぐうっ……、こ、壊れっ、ひゃうううっ！　おひりっ、壊れふぅううっ！　い……いひっ、無茶苦茶ひてぇっ！」

黒髪の美少女の噛んだ下着に唾液が染み込み、一見すれば苦しそうに髪を振り乱してい

る。だが、瞳には濃厚に悦楽が滲んでいて、激しい肛姦を享受していた。
紗弥加が身悶えるほど、嬉しさと興奮が爆発しそうに膨らんでいく。
「舞扇さんっ、舞扇さんっ……、お、俺は……」
理性が消えそうになり、彼女への想いと劣情だけに突き動かされた。
「あふっ、ヒっ……、きひゃうっ……、気持ひいいのっ、溢れへぇっ！」
肉竿を大きく揺らし、その芯奥から抑えられない欲求が急速に増大してくる。我慢なんてできず、本能だけに突き動かされるように、巨棒の根元まで押し込んだ。
「ンぐぅっ！　イっ、イイ――ッ！　ひんりゃうううううっ！」
脳内が刹那、快感のみに満たされて、真っ白な世界が見えた気がした。
どくん！　どびゅるびゅる！　どぶ、どくどく！
腸粘膜を溶かすように灼熱のようなザーメンが大量に肉棒の先端から吹き出していく。
「くあっ、はあぁ……ぁ、き、気持ち……」
悦楽が体中を痺れさせ、ブルブルと全身を震わせた。
「ふひゃぁっ！　おひりっ、熱いっ……、イ、イク……ぅ……」
ビクっ、ビクッと汗ばんだ少女の肉体が痙攣を断続的に起こす。ダラダラと淫靡なワレメから牝汁が止めどなく溢れて、恥毛を越えて臍の周りまでぐっしょりと濡らしていった。
肉棒は強張りのまま最後の一滴まで牡液を搾り出しながら、脈動を繰り返し続ける。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

竹内けん

Takeuti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!

Now On Sale!!

A5判／定価990円(税込)

KTC 特設サイトはこちらからアクセス!! http://ktcom.jp/harem/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ！
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ！
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利！
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中！

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌！　18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出！　新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム！　「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場！

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める！　携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ！